

研究主題 「総合的な学習の時間における子どもの学びの質を高めるための実証的研究  
～言語環境を豊かにし、論理的な思考力を意図的・計画的に育てるサポート学習～」

東京都教職員研修センター 研究部研究課

中央区立月島第二小学校 教諭 鶴田 裕子

研究のねらい

1 ねらい

総合的な学習の時間は、「生きる力」をはぐくむという学習指導要領のねらいを実現する上で極めて重要な役割を担うものとして実施された。

ところが、文部科学省の意識調査（平成 15 年度）や文化審議会の答申（平成 16 年度）でも指摘されているように、子どもたちは楽しんで体験学習などの活動は行うが、問題に正対しねばり強く追求する意欲、自ら考え、判断し、課題を解決する力やそれを表現する力が十分に育っているとは言えない。つまり、総合的な学習の時間で育てたい資質や能力、子どもが自ら学ぶ力としての「学びの質」が高められていない状況にある。

これは、総合的な学習の時間で子どもたちの主体性や興味・関心を重視するあまり、教員が必要かつ適切な指導を実施しなかったことや自ら課題を解決する力が子どもたちに身に付いたか否かの検証・評価が十分行われていないことによると考える。

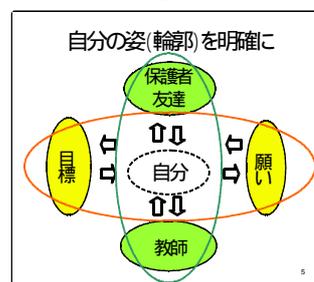
そこで、本研究では、子どもが自ら課題をもつために、論理的な思考力に着目し、それを意図的・計画的に身に付けるためのサポート学習の有効性を実証的に研究することとした。

2 研究の視点

【図 1】課題の明確化

総合的な学習の時間での「学びの質」が高いとは、一人一人の学び方やものの考え方の習得、主体的な問題解決への意欲や態度、生き方への自覚が学習の段階を追って高くなることを言う。

「学びの質」を高めるためには、一人一人の子どもが自分や人とのかわりによって自ら課題に気づき、さらに、自分や人とのかわりによって主体的に課題を解決することが大切である。



しかしながら、多くの学校の取組みに見られるように、子どもが主体的に課題をもてるように教師が教材を工夫するだけでは、「学びの質」を高めることができないことが多い。その理由として、一人一人の子どもが対象に出会った時の驚きや疑問、気づきなどの感情の高まりを素直にはっきり表現するための「表現力」が十分に育っていない面があるからである。また、自分や友達のものの見方や考え方の違いやそれぞれのよさに気づき、筋道立てて考えるための「論理的な思考力」を十分に活用できるように高めていないことがあげられる。さらに、このような「学びの質」を高めるためには、子どもがより積極的に他とかわらうとする意欲を育てることを重視する必要があると考えた。

そこで、本研究では、「学びの質」を高めるために、以下の三点をサポート学習として、総合的な学習の時間の全体計画に設定することとした。第一には、感情の高まりを素直にはっきりと表現できるように、継続的に「語彙力」を高めるための「豊かな言語環境」の場を整える。第二には、もの見方や考え方の違いやそれぞれのよさを理解し深められるように、

計画的に「論理的な思考力」を高めるための「論理的思考のスキル学習」に取り組む。第三には、言葉が生きて働き、「表現力」や「論理的な思考力」、「語彙力」が高められるように、意図的に「人との心地よいふれ合い体験」の場を設定することとした。

研究の内容

1 基礎研究

文献・先行研究等を参考に論理的思考力を身に付けるスキルの内容や方法を明らかにした。

(1) 論理的な思考力を身に付けるスキルの内容  
 小学校6年間で段階的に学ばせたい  
 論理的思考のスキルの内容  
 日常生活の言語環境に応じたソーシャルスキル  
 個としての理解、表現を高めるスキル  
 他とのかわりの理解、表現を高めるスキル  
 【参考文献】三森ゆりか 1999年4月明治図書  
 言語技術教育の体系と指導内容 他

(2) スキルの定着の方法  
 脳の発達と言葉の獲得との研究成果を踏まえ、子どもの発達段階に応じた指導方法を探る。「聞く力」「語彙力」子どもの時から大人になるまで直線的に同じ調子で教育・指導する。「語彙力」は「論理的な思考力」や「表現力」を支え、規定する。「論理的な思考力」「表現力」特に11・12歳から中学にかけて飛躍的に成長し、成人と同じような脳の使い方をするので、重点的に力を入れて教育・指導する。言葉を生活の場で働くように身に付けるには、基本的に双方向の交流としてのコミュニケーションを通して育てる。書くことに抵抗感のある子どもに対しては友達と「問答ゲーム」等の楽しいコミュニケーションを通して「くり返し練習」することにより「論理的な思考力」や「表現力」を確実に身に付ける。  
 【参考文献】文部科学省 平成15年文化審議会答申  
 これからの時代に求められる国語力について

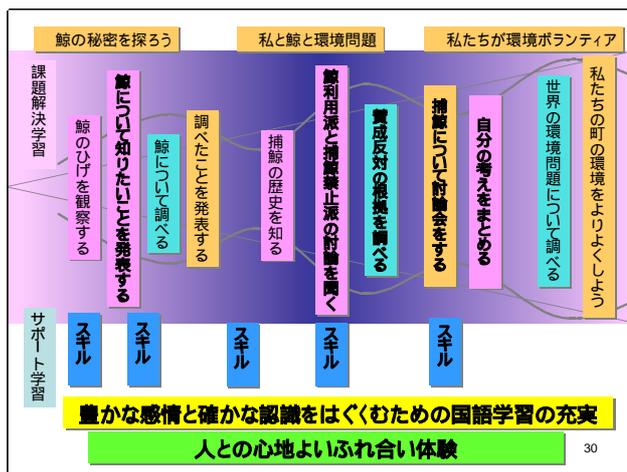
2 授業研究 第6学年総合的な学習の時間

「ぼくらが環境ボランティア」

(1) 総合的な学習の時間の全体計画における

サポート学習の位置付け 【図2】

今年度、所属校では、総合的な学習の時間第6学年は、「ぼくらが環境ボランティア」を全体で大きな1単元として、【110時間】を設定した。そのうち、3つの小単元の課題解決学習【75時間】において、子ども自らが課題解決を行う。そこでの「学びの質」を高めるために、共通に学ばせたい言葉の力をはぐくむ学習として、サポート学習【35時間】を位置付けた。



(2) 共通に学ばせたい言葉の力をはぐくむ

サポート学習について

確かな認識（論理的な思考力）を育てる言葉のスキル学習【表1】

表現力・論理的思考力						
	自己表現（整理・自己理解の明確化）		他者理解（組み立て・働きかける表現）			
	スキル	スキル	スキル	スキル	スキル	
指導内容	問答型・演繹型 レトリック： 主語・述語 明確な問答	問答型・演繹型 レトリック： どちらを選ぶか ナンバーリング	事実と意見を 見分ける	認知する： 視点を定める	討論の技術： 相手を受け入れる	描写する： 全体から部分へ 一般から特殊へ 交渉する：
表現内容・形式	私は、 ～と 思います。	理由は つありま す。 一つめは、 二つめは、	「バラは美し いです。」は 事実か、意見 か？	一人称・二人称 三人称などの視 点を変えて、も のを見る。	確かに・・・ でも、 なるほど・・・ しかし、	私が飼いたい犬は、 し てほしい
指導内容の意味	自分の気持ち・感情を素直に伝えていく。自分の意見に責任をもつ。	根拠が明確になり、視点が広がる。考えを整理し、見通しをもつ。	事実と意見を区別して、認識を確かにする。事実か根拠の明確でない推測か、意見かをはっきりさせる。	いろいろな立場に立つと、事実や感情が違ってくることを認識する。人の立場を尊重する気持ちをもつ。	「たしかに」相手の意見を見直し、よさを受け止め、自分の考えと比べる。「でも、」相手を説得するための根拠のある事実と意見を考える。	全体から部分へなど順序よく観点を洗い出し、具体的に取材する。ひと・もの・ことを分かりやすく伝えるように相手の立場で考えて納得する理由を組み立てて説得・交渉する。

所属校第6学年の子どもの実態に応じて、主体的に課題解決を行うために必要な論理的思考のスキルの内容を取り上げた。スキル～は、演繹型のレトリックで根拠を明確に表す「自己表現」から相手の考えを受け止める「他者理解」を深めるものへ、また事実と推測と意見を区別して思考を「整理する」ものから事実と推測と意見を「組み立てる」ものへと配置した。相手や状況、事象を様々な視点から理解し、相手が納得する根拠を組み立て筋道立てて伝える、「働きかける」表現力へと育てるように意図した。そのことを通して、さらに「自己理解を明確」にし、「課題の明確化」、「解決の深化」へとつながると考えた。

豊かな感情（語彙力・情緒力・想像力）を育てる言語環境

様々な経験のある大人の読み聞かせは、その感情を様々な言葉のリズムや響き等から感受させ、言葉を理解する心のひだを深くする。そのために、継続的に教師や保護者・専門の人による読み聞かせ等を行い、言語環境を整えることにした。

人との心地よいふれ合い体験

他とつながる心地よさを体感させ、より積極的に他とかかわろうとする意欲を高めるために、意図的に異学年や地域の大人とのふれ合いの場を設定することにした。

### (3) 論理的な思考力を育てるスキル学習による効果的な指導の工夫

論理的な思考力を育てるスキル学習の定着を図る工夫

- ・二人組の問答ゲームやグループ討論を行い、双方向のコミュニケーションを重視し、相互評価させることにより、スキルの活用方法や意味をつかませ、定着を図ることにした。
- ・「事実と意見を見分ける」スキルは、レベル1（基礎）・レベル2（基本）・レベル3（応用）と問題内容の程度の違う学習カードを繰り返し活用し、定着を図ることにした。

子ども自ら論理的な思考力を育てるスキル学習の習熟の程度を自覚する工夫

- ・学習カードの正答率やかかった時間等の量的な基準を設定して、子ども自身に変容を自覚させることにした。
- ・子どもに振り返りカードの評価の視点を選ばせ、月に1度ほど自由記述をさせたり、既習のスキルの習熟の程度がわかるカードの形式を作成し、自己評価させて質的な変容を自覚させることとした。教師や友達の表現のよさからスキルを身に付けさせるとともに、他から学んだことを自覚させるようにした。

子どもに成長や学びのズレを意識させる教師の評価と指導の工夫

- ・スキルの質的な評価規準を作成した。
- ・課題解決学習の各場面で活用するスキルや方法について、指導・評価計画を作成した。その評価では、子どものよさを積極的に認め賞賛し、課題を明確にすることを重視した。

授業研究の成果と考察

#### 1 単元構成の工夫と全体の授業の流れ

総合的な学習の時間における全体の単元構成は、第1次「鯨の秘密を探ろう」、第2次「私と鯨と環境問題」、第3次「私達が環境ボランティア」の3つの小単元とした。小単元のまとめりとしては、第1次は鯨について課題に迫るための既習学習の充実を目指すための「知る」段階であり、第2次は鯨の捕鯨問題について課題を選ぶための「考えをもつ」段階であり、第3次は価値ある課題を見いだすための「挑戦する」段階とした。各小単元においては、

「出会い・課題発見・追究・振り返り」の学習サイクルを繰り返し、各学習場面に必要なスキル学習を位置付け、「学びの質」を高めるようにした。

【表 2】Aさんの意見文

11/11【1100語初めの振り返りカードとの割合(9.1)】捕鯨について  
 ぼくは、捕鯨に賛成です。  
 理由は、四つあります。(略)  
 四つ目は、鯨の生態は、まだほとんどわかっていません。だから実験などして、どこが危険なのかがわかるからです。みんな同じほ乳類だから、同じ仲間だから殺したくないと反対の人はいます。確かに、同じほ乳類だから殺したくないと、ぼくも思います。でも、鯨を調べるには三百匹くらい捕らなければわかりません。まだ、生態がわかりません。だから捕ったほうがいいと思います。  
 反対の人の意見の多くは、減っているのもあるなどがあります。でも、ぼくは、減っているのは、捕らなければいいと思います。世界最大の鯨シロナガスクジラは、減っています。ぼくは、シロナガスクジラが好きです。だから、そのシロナガスクジラが減っていると聞くとちょっと残念な気持ちになります。その点ではちょっと反対の立場の人に賛成です。逆にミンククジラは増えています。だから、シロナガスクジラをとらないで、ミンククジラを捕ればいいと思います。でも、ちょっとかわいそうだなあと 생각합니다。  
 生物は、鯨でもなんでも大切なんだなあこの学習でわかりました。鯨やねこ、犬やライオン、トラなどの生物、そして、人類などみんながんばって生きています。でも、ライオンやオオカミ、わしなどをはくせいにするのは許せません。生物を大切にしてほしいと思います。

## 2 課題解決学習と論理的思考のスキルとの効果について

子どもが鯨の口ひげを観察したことをきっかけとして、鯨について調べ学習を行った。その際、自分の意見と調べたことを区別してまとめられるように、スキルとして「事実と意見を見分ける」問答ゲームを行い、見分け方の根拠を明確にした。

次に、調べたことを発表させた上で、捕鯨の歴史について学ばせ、捕鯨禁止派と鯨利用派に分かれて討論した。討論する際に必要なスキルとして「視点を変える」「確かに、・・・でも」を意図的に学習させることとした。子どもはそのため、友達の意見と自分の意見を明確に聞き分けようとする姿勢が見られた。そのことは、また、捕鯨について論点を一つの立場から考えるだけでなく、別の立場からも考えることが大切であることを気付かせるきっかけとなった。

子どもの表現したものから「『学びの質』の高まり」を見取ることにより、次の課題へとつなぎ、価値ある課題を友達と考えていく指導の修正や改善を行うことができた。

このような高まりを見せた子どもは、他の環境問題を考える際にも、様々な視点から自分の問題として切実に考えることができるようになった。また、根拠の確かな情報を整理し組み立て考えを深めたことにより自分の足元からよりよくしていくことに気付いた。これは、総合的な学習のねらい「(2)自分の

生き方について考える」ことに迫り、価値ある挑戦する課題を見いだすことにつながる。

## 3 論理的思考のスキルの定着について

意図的・計画的に論理的思考のスキルを身に付ける活動を行い、子どもの意識調査を継続して行った。「できた」と 設問 事実か意見か、正しい見分け方が分かりましたか。

答えた子どもが9月31.7%から12月84.2%へと増えてい【グラフ1】対象児童 6年27人  
 11月の意見文には、根拠の明確な事実と意見が書けた子どもが93%いた。このことから、スキルの定着には、継続的な指導による効果があると言える。

## 4 全体の成果

総合的な学習の時間において、意図的・計画的に位置付けたサポート学習は、子どもが自ら学ぶ力としての「学びの質」を高めることが明らかとなった。

### 今後の課題

総合的な学習の時間における「学びの質」を高めるために、子どもの語彙力や論理的な思考力のレベルを見極め、サポート学習を位置付けた学校の全体計画を作成する。

